



Title	宗教の計量的分析：真如苑を事例として
Author(s)	川端, 亮
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/1397">https://hdl.handle.net/11094/1397</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	かわ ばた あきら 川 端 亮
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学 位 記 番 号	第 18137 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 15 年 9 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	宗教の計量的分析—真如苑を事例として—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 直井 優 (副査) 教 授 厚東 洋輔 教 授 伊藤 公雄

### 論 文 内 容 の 要 旨

本稿は宗教教団真如苑を対象に、この教団が現代において人々をひきつけている要因を主に計量的分析方法を用いて探るものである。

真如苑は日本の新宗教の中で有名な創価学会や立正佼成会などと同じく昭和 10 年代に立教した。創価学会や立正佼成会は高度経済成長期に信者が急増したが、オイル・ショック以降は、「宗教ブーム」といわれていたにもかかわらず、教勢を拡大することができなかった。それに対して真如苑は、高度経済成長期に信者はさほど増えず、オイル・ショック以降に信者数が急速に増えた教団である。このような発展パターンをとる教団はほとんど見られない。なぜ真如苑だけがオイル・ショック以降に信者数を伸ばすことができたのか。その要因を探ることが目的の 1 つである。

真如苑には真如霊界から発せられる霊言があり、その霊言に従うことによって信者は救われる。この救いがあるたいので、真如苑の信者数が伸びたのだという説明も教団側の説明としては可能であろう。しかし、真如霊界の存在やそこから霊言が発せられるかどうかなどは、社会学で検証できる問題ではない。そこで社会学としては、宗教のどの側面を対象とすることができるのか、その際どのような方法を用いるのが適切かが問題となる。

このように本稿は教団研究の側面とともに、宗教研究における調査分析法の研究というもう一つの課題をもつ。従来の日本の宗教研究のほとんどは、事例的質的データ分析方法をとっている。本稿ではほとんど用いられていない質問紙による計量的データ分析と、自由回答データとインタビューデータをコンピュータによってコーディングし、計量分析するという新しい手法で、信仰をいかに描き、理解できるかを論じる。

1 章では、真如苑の概要について記述している。歴史を簡単に振り返ったのちに、本稿で中心的に扱う 618 人の霊能者の特徴を質問紙調査の結果によって描いている。真如苑の修行の中心は霊能者と 1 対 1 で対座して行われる接心（せっしん）と呼ばれる独自の形態のものである。その接心とは、ミーディアムと呼ばれる霊能者を介して、真如霊界といわれる世界とつながり、その霊界から発せられる「霊言」という言葉を手がかりに、自分の心を磨き、才能を開発する修行である。信者はこの接心を月に最低 1 回は受けなければならない。したがって真如苑が発展し、多数の信者を集めるためには数多くの霊能者の存在が必要である。その霊能者は質問紙調査の結果によると、学歴、職業、収入などの点で社会的地位の高い人が多かった。また女性が多く、年齢層は中高年が中心である。霊能者が入信したときの動機は、病気や家族の問題などの個別の問題解決を求めると利益を求めると動機がかなりみられる。彼らは入信後、接心を受け続けて信仰を深める。そして大乘、歓喜、大歓喜、霊能という霊位を獲得し、霊能者となる。この霊位向上の過程の最初である大乘を目指す時点で、個別の救済ではなく、真如苑の与える普遍的救済を求めるようにな

っていたという変化がみられた。

2章では方法論について、従来の宗教社会学で行われてきた調査研究をふりかえりながら、量的なデータの分析方法と質的なデータの分析方法について検討した。

まず計量的な調査研究がなぜ少ないのかを宗教という対象の特性を考慮し、サンプリングの問題、比較対象の問題、信仰のとらえ方の問題の順に検討した。宗教研究においては、たとえ教団の協力が得られたとしても信者集団を母集団として特定するのが難しいことや教団ごとに「神」や「霊」などの用語と意味内容が異なるので教団比較のための共通の質問文作成が難しいこと、信仰という概念を操作的に定義し、測定することが難しいことを指摘した。これらの点は今まで宗教研究者はあまり意識してこなかったが、特に信仰の測定に関しての議論はほとんどみられない。そこで信仰の測定がうまくいった質問紙調査の例として、浄土真宗、妙智会、崇敬真光の3研究をあげて検討した。この3例に共通するのは、信仰を段階的にとらえて測定していることであった。日本の新宗教の信者の回心は、一時の神懸かりなどによる急激な回心ではなく、徐々に深まる持続的な過程であるといわれている。急激な回心であれば信仰のあり、なしという2値変数で測定することも妥当であるが、信仰の深まりにも階梯があるならば、段階的に測定することがより妥当である。また段階的に測定することで、教団内の信仰の程度の違う信者集団間を比較することができ、教団間の比較が困難という問題が解消する。また、段階的測定により信仰が順序尺度以上に数値化されれば、計量分析で用いられる分析法も増え、詳細な分析が可能となる。

多くの宗教研究は信仰が数値化して測定しにくいために、インタビューや観察という手法を用いてきた。そこで得られる多くの文字データは、従来は数値化してコーディングすることが難しかった。2章後半では、近年に急速に発達したコンピュータの能力を生かして、文字データをコーディングする方法について検討した。とくに近年欧米でよく用いられている NUD・IST や Atlas/ti などの CAQDA のソフトウェアと本稿で用いる「計量的テキスト分析」のプログラムでは分析の考え方が違うことを述べた。計量的テキスト分析は、個々の文すべてを正確にコーディングすることを目指すのではなく、大量のデータの中で頻出する語を正確にコーディングすることを目指す。そのことによって計量分析が可能となり、多変量解析の手法を用いて潜在的な概念を見いだすのと同じように、質的データの分析で文字を読んでいるだけでは気づかない、あるいは気づきにくいデータの「潜在的論理」を発見することを目的としている。そのためコーディングされる部分は単語あるいはそれに準じた単位で非常に短く、そのコーディングが半ば自動的に、パソコンが機械的に行うという特徴を持つ。

この計量的テキスト分析は、質的データ分析方法の中では有名なグラウンデッド・セオリーと似ている側面がある。概念やカテゴリーという用語はグラウンデッド・セオリーで用いられる意味を限定して用いており、コーディングの3段階も取り入れている。オープン・コーディングの段階では日本語の解析プログラム、軸足コーディングではクロス表の分析、選択コーディングでは等高線図を用いるなど、分析に用いる道具は異なっている。

3章では、まず真如苑の発展の時期を明らかにしている。真如苑は1970年代に入って教勢を拡大したといわれてきたが、信者数の増加だけでなく、霊能相承者数や地方の支部・本部設立などの状況を併せて考えると、1970年代の前半から半ばにかけては停滞に近い低成長期であることがわかった。そしてこれ以前の時期には、入信してから霊能者になるまでに10年未満の期間しか要しないが、これ以降は13年以上の期間を要するようになる。この原因を探ったところ、この時期に霊能者になるための相承会座（えざ）の制度や接心修行の制度の改革が行われていることがわかった。つまり真如苑では、1970年代から霊能者を最大限に効率よく養成するために組織や制度を合理化し、それによって「誰でも霊能者になれる」という言葉が実現していくのである。天性のものとして、霊的な要因を持っているかどうかにかかわらず、強い信仰心と努力があれば誰でも霊能者になれるのである。このいわば属性主義から業績主義への変換によって実現した霊能者養成システムが当時の日本社会に受け入れられたこと、また業績主義の選抜原理は、少なくとも当時の宗教においてはそれほど多くなかったために、信者の霊位向上意欲を高め、80年代の霊能者の増加とそれにとまなう信者の急増をもたらしたと考えられる。

3章後半では、質問紙調査データをもちいて入信を導いた人との関係を社会的ネットワークの観点から分析した。入信時に直接導いてもらったり影響を受けたという人は、家族・親戚が多い。この関係は、信者数が増加した1970年代以前は、家族・親戚が約半数を占めるが、70年代以降は半減し、かわって直接的な知り合いではない二次の関係（子ども同士が知り合いなど）がもっとも多くなる。このように信仰を伝える紐帯が強い紐帯から弱い紐帯へと変化

することで急激な信者増を生むのだと考えられる。またこの弱い紐帯は、女性では近隣関係が中心であることがわかった。創価学会や立正佼成会では、信者の急増期直後に信者組織を擬制的親子関係から地区ブロック制へと変えている。真如苑も女性にのみ注目すれば、近隣関係を中心とする地区ブロック制に変更することも可能であったかもしれない。しかし男性の弱い紐帯は近隣ではなく仕事上の関係が中心であり、地区ブロック制への移行はそれら男性の関係を壊してしまうという欠点がある。このように真如苑の導きの親子関係は、地区ブロック制を促進する要因と必ずしも促進する方向に働くとは限らない要因とが混在していることが明らかになった。

4章では、自由回答法によってえられたデータを計量的に分析し、真如苑において接心を成り立たせている核となる霊能を記述することを試みた。霊位向上の過程である大乘、歓喜、大歓喜、霊能のそれぞれの相承時に取り組んだ内容を自由回答として答えてもらったデータをテキスト形式で入力し、AUTOCODE プログラムでコーディングした。極端に出現度数が小さい文字列や意味のない文字列を省き、490 のコードを残し、それらをまとめて 45 のカテゴリーを作った。45 のカテゴリーの中で出現度数が 50 に満たないものを再度省き、20 カテゴリーを残して、それらのカテゴリー間の関連をジャカードの類似性測度を用いて調べた。「家族」に「感謝」のようによく見られるカテゴリーの対が3つあり、さらに霊位の向上にともなって、多くのカテゴリーに関連が見られることがわかった。さらに15 カテゴリーに限定し、霊能の段階のカテゴリーの関連を MDS (多次元尺度構成法) により表した。これらの分析の結果、大乘の段階でのことばの結びつきは、教団の教えに染まっていない初信者の図であり、日本人全体が持つ民俗信仰心の要因を含んでいた。それに対して霊位が向上し、霊能の段階になるとことばの結びつきは複雑になり、「教え」というカテゴリーを中心に他のカテゴリーが結びつけられていた。これは初信の者から訓練を経た信仰者への変化といえよう。このように「取り組み」を記述した際に同時に用いられることばの変化は、信仰の深まりを、さらに解釈すれば世界観の変化を表しているといえる。このことから、MDS の分析結果をプロットした図は、真如苑の霊能という目に見えないものをグラフという形で「記述」したものといえる。

この分析から得られた「家族」の重要性、「教え」に「おまかせ」とそれらに絡まる「とらわれのない心」や「見つけ」などのことばに注意することによって、つぎの5章のインタビューの解釈が助けられる。

5章では、霊能者に対するインタビューというテキストを KT2 システムという開発したコンピュータ・プログラムによってコーディングし、二人の霊能者の信仰史を描いた。まずテキスト入力されたインタビュー・データを、時間の経過にそっていくつか階層化(分割)する。階層化は複数の意味を持つことばの曖昧性を取り除くための手法として取り入れられたものである。このデータを KT2 システムでコーディングした。コーディングの方法は、字種切り方式と一部抽出語辞書を用いる方法を併用した。この段階がオープンコーディングにあたる。つぎに軸足コーディングの段階に移る。機械的コーディングの結果抽出されたコードと時間の区切りの間でクロス表を作成する。クロス表の関連が大きくなるように、時間の区切りの変更と、コードの統合を行う。この作業を繰り返して時間の区切りを確定し、コードを統合していく。統合されたコードがカテゴリーとなる。さらに選択コーディングの段階に進む。統合されたコード群であるカテゴリーの度数を時間の軸との間で等高線図というグラフに表す。グラフに表されたカテゴリーの出現パターンを見て、さらにカテゴリーの統廃合を進める。こうして最終的に14 カテゴリーに統合した。

最終的にできあがった等高線図を見ることによって、インタビューの全体像を把握することが容易になる。全体像が把握できるので、カテゴリーそれぞれの関連が明らかとなり、概念が浮上する。この分析からは「気づき」という概念が浮上した。信仰が深まるにつれ、接心の力に気づき、我に気づき、自分を見つめることを知り、とらわれに気づき、自分の力を越えたものに気づき、霊界の影響を知ることによって教えに気づく。このように信仰の深まる過程は、「気づき」の変容過程としてとらえることができることがわかった。

しかしこの分析は、計量的分析であるので、質的データのおもしろさを十分にすくい取ることができない。読んでわかるおもしろさ、生々しさは数量では表しがたく、むしろこの分析では完全に抜け落ちる。しかしコンピュータによるコーディングでどのことばが拾われなかったかは明確であるので、それらのことばを意識的に用いてライフヒストリーを記述していくことができる。計量的テキスト分析で拾い得ない部分を多く含む記述を意識的に書くことによって、質的なデータのおもしろさを生かす記述ができる。このようにして、二人の霊能者の信仰史の全体像を把握し、おもしろさのある記述を行うことができた。

最終章では、宗教社会学における方法論を検討し、本稿で用いられた計量的分析方法の意義を考察した。宗教社会

学の唯一ともいえる方法論である内在的理解という方法を検討し、その意義は民俗信仰心という理解のモデルを発見したことにありと結論づけた。そしてこのようなモデルを発見するには、虫瞰図の視点と地図の視点を併せた鳥瞰図の視点が必要であることがわかった。鳥瞰図の視点を得るために必要な地図の視点は従来の宗教研究では欠けている視点である。本稿で示した自由回答の計量的な分析と KT2 システムによる質的データのコーディングや等高線図は、真如苑の霊的世界の全体像を把握することを容易とする。宗教世界の理解のために、とくに全体像の理解のために本稿で用いた方法は意義があるといえる。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文は、宗教教団の信者が信仰を深めていく過程を理解しようとするものである。

教団の歴史と質問紙による計量的な分析から信仰者を養成する制度の成立過程を明らかにし、信者の社会的ネットワークから信者増の要因を検討する。また自由回答データとインタビュー・データをそれぞれ別の方法でコンピュータ・コーディングすることによって、信仰が段階的に深まっていくことを2次元的なグラフとして表現し、信仰を理解できる形として示している。

近年信者を急増させた真如苑の教団研究としてだけでなく、宗教における計量的手法を用いた研究としても、また宗教に限らず社会学における質的データのコーディング、分析法としても価値のある研究である。

以上により、本論文は博士（人間科学）の学位を授与するに十分に値するものであると判定した。